

2005年に「最首病」を発症した者です。

大橋 さつき

私が和光大学に着任したのが2002年、その翌年に隣の学科に最首先生が来られました。先生の母校である千葉県立国府台高等学校が、偶然にも私の初任校であったご縁から、最初から親しくお話をさせていただいてはいました。しかし、先生の言葉が身体の奥まで染みこんで、ぐるぐると問い続けてしまう症状（「最首病」と私は呼んでいます…笑）が始まったのは、2年後の実母の大病がきっかけだと思っています。最首塾でも、先生がよくこの話題に触れてくださいますので、あらためてふりかえってみたいと思います。

2005年4月、新年度が始まって慌ただしくしている頃、突然、故郷長崎の母が肝臓を患い倒れ入院したとの連絡を受けました。元気で明るく働き者…、そんな印象しかなかった母が急速に弱っていく姿に、周りはただただ動揺していただけでした。病状は日に日に悪化していき、5月の連休には、ついに「生体肝移植手術」しか助かる見込みがないと診断され、私がドナーの第一候補者として検査を受け、移植手術の日が5月下旬に決定しました。それまで週末ごとに長崎に帰っていましたが、いよいよ大学の仕事を一時休んで手術に備えることとなりました。諸々手続きを済ませ大学を離れる日に、最首先生が私を呼び出してくださり、長い時間、話をしました。とにかく「しっかりしなくては」とパンパンに張り詰めていた私の心をゆるめてくださり、私はその時、やっと不安な気持ちを吐露できたように記憶しています。最首先生の顔を見ながら深く息を吐き吸うことができました。

その時は、二人とも、次に会うときには私の肝臓は半分無くなっているのだと思って語り合っていたはずです。しかし、娘を想う親心からか、母は土壇場になって移植手術を拒否するようになり、そのうちに医者も驚くほどの回復を見せ始め、手術の数度の延期・保留を経て、移植を受けないままで7月に退院したのです。大学病院の教授回診で偉い先生たちが、母の目の前でカルテを見ながら何度も首を傾げていましたから、「奇跡的」と言われるレベルの復活劇だったのだらうと思います。

この間、私は、ドナーという立場上、長崎を離れることが許されなかったため、毎日病院の面会時間いっぱい、朝から晩まで母に寄り添っていました。どんなに看病しても母の病状が良くなり、小さく細くなっていく母の身体に触れるたび、悔しくて不安で涙することもありました。父や弟とは互いに支え合ながらも、疲れがたまり、ふとした言動にぶつかり合うこともありました。そんなことがある度に、最首先生の言葉を思い出したり本を読んだりしていました。正直なところ、私にとっては、これが、自分事として、「ケア」や「家族」について深く考えた最初の体験であったと思います。そして、おそらく、赤ん坊の頃以来、最も長く密に母と二人で過ごした特別な時間でもありました。もちろん、身の周りの世話をしたり、身体をさすってやったりもしましたが、それ以上に、ドナー候補の私と母は運命を直接的に共有しており、

ただの家族の介護を超えた不思議な関係だったのかもしれない。

結局、無傷で大学の職務に戻ることができた私は、すぐに、最首先生にお願いして「シンポジウム：『からだ』から『障害児・家族・地域』の支援を考える」を企画しました（大橋,2006）。今思えば、かなり衝動的な行動だったかもしれませんが、療育に携わってきた自分こそ、今ここで、一度立ち止まって考える場が必要だと痛感していました。シンポジウム当日は、まず、私たちの取り組みの紹介として、「ムーブメント教育・療法」を基にした集団遊びのプログラムを実施しました。最首先生は、障害のある子どもやその家族、学生たちが共に遊ぶ様子をじっくり見守った後、身体を軸にした実践内容を評価してくださりました。「個々の身体の絶対性、個別性を受入れ、その身体が欲することをそのままに信じるのが大切」と、この時にいただいた言葉を支えに、実践を続けてきたように思います。また、講演では、星子さんの話を紹介しながらケアの本質について語ってくださりました。討議の際は、「療育とか支援を担っている先生たちは、『お節介』な生き物だから気をつけないと…」との一撃から始まり、会場がどっと沸きました。若い時に、あの言葉を浴びておいて本当によかったと気づくことが今までに何度もありました。

その年は、私は何かに駆り立てられるように活動したようで、秋（2005年11月）には、「WOMB」というタイトルで、学生たちとダンスパフォーマンスの舞台公演を開催しています。最首先生には、ここでも、パンフレット掲載用に以下のような挨拶文をいただきました。

ある集団的な振る舞いで、自分が直接に接するまわりの人とだけ、協調したり・反撥したり・従ったり・リードしたりする。すると、その集団が見事なパフォーマンスを展開する。それが見ている人にわかる。細胞とか生きものは、実は巧まずしてこのようなボトムアップの振る舞いをしているのだが、このようなことを可能にする何かは何なんだろう。WOMBの試行・チャレンジはまさにその何かに向って、その途上で、生の躍動にふさわしいパフォーマンスを見せてくれる。

当時から、発達支援の現場におけるムーブメント教育・療法の活動と創造的な身体表現や舞台づくりの取り組みは、どちらも私にとって大切な実践でありました。けれど、専門はどちらですかと聞かれることも多く、研究職としてはどちらかを選べと言われているようで、答えに迷う自分もありました。しかし、その両方が、まず「遊び」であるということと、そして、その根底は「共同性の確認、回復、強化」であるとの最首先生の言葉を受けて、「根っこの方で繋がっているみたいだから、雑然としているけど、このまま続けて大丈夫！」と不思議な自信を得たのも有難いことでした。

その後も、私が大学で何か企てたり参加したりするのは、最首先生ありきの催しがほとんどで、その度に、先生の言葉を求めて頂戴してきました。東日本大震災後、地域子育て支援や被災地支援として遊び活動の実践に取り組んだ際、その研究報告の催しにおいては、「遊びは『もやい直し』には欠かせない」との評をいただきました。さらに、インクルーシブな活動へ発展

の中で、地域社会が解体し共通の規範が薄れ、人々の生活が孤立していく中で、「異なるもの同士が共に遊ぶ」試みを積み重ねることの意味を考えるようになりました（大橋,2018）。現在、コロナ禍での集団遊び活動、接触の多い身体活動は実施が難しい状況が続いていますが、だからこそ、今、考え続けたいと思っています。

最首先生の言葉に導かれ、ここまで進んできましたが、結局のところ、「分からない」が増える一方です。最首先生がここのところお話される「二者性」についても、ぐいぐいと誘われ一生懸命について行って、もしかしたら、こういうことかしら…なんて思った瞬間に、宇宙の真ん中にぽ〜んと放り出されるような感覚を繰り返しております。

それでも、今のところは、私自身の体験に基づく限りでは、二者性は、「分かる一分からない」、「他者を理解する」というような関係とは別の次元の、「共に居る」、「共にある」ことによる確かな「つながりのようなもの」の実感にあるのではないかと感じています。

ある日の最首塾で、先生が「一般化できない絶対的な二人の関係において、二者性がある」と話されました。最首先生との出逢いにより、自身の活動の意義を身体的次元での他者との交流、身体の絶対性から生まれる固有の関係性に置いてきた私にとっては、ここは拠り所だと思っています。あの時の母との時間をふりかえてみても、「二者性」の発生、深まりには、なんらかの運命によって、「私」が「いのちはいのち」の二重構造に直接に対峙してしまうことが関係しているのではないだろうかと思います。「個別のいのち」の底にそれを支える「永いのち」が流れていることを混沌としたままに、理屈抜きで実感することによって、「二者性」が生まれ、響き合うのではないかと…。もしかしたら、私の周りで、集団で舞台や遊びの場づくりに挑む人たちは、「生の諸様式の雑然たる賑わい」の中にどっぷり身を置いて、全身で泣いたり笑ったり、興奮したり落ち込んだりしながら、「いのちはいのち」の運命に見舞われる疑似体験をしているのだろうかとかさえ感じています。

さて、母のその後ですが、自宅療養を続け順調に回復し、定期検査等は続いているものの、おかげさまで2022年現在、健やかに過ごしていることを申し添えます。

コロナ禍の最首塾で、「コロナより厄介な最首病に罹っている、禁断症状のようなものが出るので、（先生の）生声を聴かないといけない…」と、少々ふざけ気味の発言をした私に、「完治は見込めませんので、うまく付き合う方法を身につけましょう、お互いに…」と真面目に声をかけてくださった方がいました。挑んでいる先輩方や仲間が様々な場に居ると知ることも嬉しいことです。「分からないことは希望なのだ」との言葉を胸に、問い続けたいと思います。

<文献>

- 大橋さつき（2006）『『からだ』から『障害児・家族・地域』の支援を考える』報告，東西南北：和光大学総合文化研究所年報2006, pp.242-246.
- 大橋さつき（2018）「異なるもの同士が共に遊ぶことの意義と課題」, 和光大学現代人間学部紀要（11）, pp.91-106.